

## 社会的状況と「自己カテゴリー」の決定過程

飛田 操

### 自己カテゴリー化と意思決定

一般にいくつかの可能な行動の選択肢のなかから、(多くの場合)一つを選択することを意思決定という。いくつかの可能なカテゴリーのどこに自己を帰属させるかという自己カテゴリー化の過程は、意思決定の過程そのものであると考えることができる。

ただし、自己カテゴリー化は、社会的存在である自己をカテゴライズするため、固有の特徴がある。特に、社会的文脈や社会的状況の影響が大きい。自己カテゴリー化理論 (Turner, Hogg, Oakes, Reicher & Wetherell, 1987; Turner & Oronato, 1999) のなかでも、「ある文脈では個人的アイデンティティが顕現化し、ある文脈では社会的アイデンティティが顕現化する」こと、そして、「集団間プロセスは、後者の文脈において顕著になる」と指摘し、「どの社会的カテゴリーが顕現化するかは文脈に応じて変わる」と仮定し、アイデンティティや社会的カテゴリーの顕在化に及ぼす社会的文脈を重要視している。

このような自己カテゴリー化におよぼす社会的文脈や社会的状況の影響を考察するための第一の論点として、自己を納めるべきカテゴリーの数と、その重要性にかかわる問題がある。

北カリフォルニアのあるスーパーマーケットは、75種類のオリーブ油や250種類の辛子など、グルメ食材の品揃えがきわめて豊富である。Iyengar & Lepper (2000) は、この店にジャムの試食ブースをつくり、ある週末には6種類のジャムを並べ、別の週末には24種類のジャムを並べて買い物客の反応を調べるという実験を行っている。

その結果、24種類のジャムが並べられていたときは買い物客の60%が試食したが、6種類のジャムが並べられたときには40%しか試食しなかった。しかし、

驚くべきことに、ジャムの種類という選択肢の数は購入には逆効果となった。品揃えの多いブースでは買い物客のわずか3%しか購入しなかったが、少ない選択肢しか与えられなかった買い物客は、なんと30%近くが商品を購入していたのである。

この結果は、選択すべきカテゴリーの数が多いほど、意思決定の困難さが高まる可能性を示している。このように、自己を納めるべきカテゴリーの数も自己カテゴリー化に影響を与えていると考えることができ、一般にカテゴリーの数が多くなるほど、自己カテゴリー化も困難になると思われる。

ただし、Iyengar & Lepper (2000) の対象は、ジャムの選択という比較的重要性が高くないものであった。この場合、仮に間違っただ判断をして、好みとは異なるジャムを選択したとしても、その損失はそれほど大きくないと思われる。ところが、自己カテゴリー化の場合、誤った判断をして自己カテゴリー化をすると、誤った自己認知や自己評価が行われ、その結果、社会的な不適応を生じかねないリスクを伴う可能性がある。適切なカテゴリーに自己を納めることの重要性や、不適切なカテゴリーに自己を納めたときのリスクの大きさも、自己カテゴリー化に影響するのであろう。

またカテゴリーそのものの社会的価値や個人的重要性が自己カテゴリー化に多大な影響を与えていると考えることができる。自尊心維持や自己高揚動機などは、できうるならより社会的価値の高いカテゴリーに自己を位置づけたいとする動機がわれわれに存在することを示している (Baumeister, 1998; Higgins, 1996; Sedikides, 1993)。

Alexander & Lauderdale (1977) も、特定の状況における社会的な望ましさが、その状況での行動の選択に影響するとする状況アイデンティティ理論 (situated identity theory) を提唱している。状況アイデンティティ理論では、さまざまな行動選択肢があり、そのなかから一つを選択する必要が生じるとき、第一段階として、それぞれの選択肢を選んだときに得られるであろうアイデンティティ (状況アイデンティティ) を予測し、この予測を基に好ましい行動方針が決定されるとしている。そして、多くの場合、社会的に最も望ましいアイデンティティと結びつくような選択肢を選ぶことになるだろうと予測している。

さらには、いったん選択したカテゴリーから、より望ましいカテゴリーへ自らのアイデンティティをシフトさせていく動的な過程も存在すると考えることもできよう (磯部・浦, 2002)。

カテゴリーの社会的価値が自己カテゴリー化に影響しているということは、そのカテゴリーがどのように表現されるのかという表現形態も、自己カテゴリー化

の影響を及ぼしていると考えられることができる。

Schwartz (2004) は、子どもの監護権をめぐる争っている両親のどちらに監護権を与えるべきかを、実験参加者に判断させるという実験を行っている。一方の親は「平均以上の収入があり、子どもとの心理的な絆も強い」が、「健康上の問題を抱えている」こと、また、「出張も多く、社交活動も活発に行っている」と記述された。つまり、親として、ポジティブな側面も多いが、ネガティブな側面もあると記述された。もう一方の親はこれらすべての点で平均的であるとして記述された。

ある実験参加者たちに「どちらの親が監護権を持つべきか」と尋ねたところ、3分の2近くがネガティブな側面もあるがポジティブな側面もある前者の親を選んだことが示された。ネガティブな側面よりポジティブな側面が上回ると判断されたといえよう。しかし、もう一つのグループの実験参加者たちには、「どちらの親には監護権を与えるべきでないか」と質問したところ、前者の親を選んだ人の割合は、後者の親を選んだ人の割合よりも少しだけ多かっただけになったのである。「監護権を与えるべきでないか」という否定的な言い回しにより、実験参加者たちは、その親のネガティブな側面や弱みに、より注目したことが示されているといえよう。

Schwartz (2004) の研究は、他者の判断にかんする表現形態の影響についての検討であったが、このようなカテゴリーの表現形態の影響は、他者の判断だけでなく自己カテゴリー化においても見られると考えることができよう。たとえば、同じ行動特徴は、「世話好き」とも「おせっかい」としても表現が可能であるが、このような表現形態が異なると、カテゴリーの持つ社会的意味も異なってくるのである。

この表現形態がどのようなものとなるのかは、そこでの社会的文脈をどのように意味づけているのかに従うと考えられる。例えば、「腹痛のため12時に帰宅した」という同一の行動を、「腹痛が我慢できずに帰宅した」したがって「我慢強くない」というカテゴリーに対象（この場合、自己）を分類することも可能であるし、同じ行動を「腹痛があるのに12時まで我慢した」したがって「我慢強い」というカテゴリーに対象を分類することも可能になるのである。このように、同一の行動であっても、そこで付与されている社会的文脈によって、全く異なる意味を持つカテゴリーに分類されることになるのである。

自己をカテゴライズするさいには、「何のために」自己をカテゴライズするのかが顕在化するカテゴリーの種類に影響すると考えられる。例えば、飛田(1986)は、大学生を対象に、親友や親といった異なる対象を想定して、その対

象に対して自己を記述してもらい、その記述された自己の側面をカテゴライズして分析している。その結果、対象によって、記述された自己のカテゴリー数だけでなく、カテゴリーの種類も異なることを示している。また、Kenrick, et. al. (1990) も、プライベートな状況やビジネスの場などの社会的状況によって、そこで顕在化する性格特性が異なることを明らかにしている。

ここでは、自己カテゴリー化は、社会的な状況のなかでなされるため、どのような社会的文脈のもとで、このカテゴリー化がなされるのかという社会的文脈が、そこで生起する行動の意味を規定し、自己カテゴリー化に影響することを示した。

## 社会的状況の影響過程

Turner et. al. (1987) は、自己カテゴリー化において、自己を定義する社会的カテゴリーは、「集団内の類似性認知と集団間の差異性認知によって規定される」としている。

彼らが主張するように、「集団内の類似性認知」と「集団間の差異性認知」によって自己カテゴリーが規定されるとしても、このような自己カテゴリー化がなされるためには、それに先行するふたつの認知プロセスを仮定することが必要となろう。その第一は「集団内」もしくは「集団間」という認知の成立であり、第二が「類似性」もしくは「差異性」の認知の成立である。

第一の点、すなわち「集団内」もしくは「集団間」という認知の成立は、いわゆる所属集団の問題と関連する。ターナーたちは (Turner et al, 1987) は、所属集団を自明なものとして想定しているように思われるが、じっさいには自分がある集団に所属しているかどうかを判断するとき、そのメンバーシップは明確な場合もあるが、明確でない場合もあろう。

例えば、性別は多くの人にとっては、メンバーシップが明確なカテゴリーであろう。ただし、性別カテゴリーが顕在化するの、特定の状況においてだけであることが指摘されている。花輪 (2002) は、大学生と有職成人へのインタビュー調査により、性別カテゴリーが顕在化する社会的状況について検討している。その結果、「ふだんは性別カテゴリーを意識することは少ない」が、「ヒゲを剃るとき」や「満員電車で近くに異性がいるとき」、「相手から異性として扱われるとき」などに性別カテゴリーが顕在化することを示し、カテゴリーの顕在化に及ぼす社会的状況の影響について考察している。

状況によっては、性別カテゴリーは顕在化しないことを示した研究もある。特に、地位の違いがある場合、性別カテゴリーの顕在化は抑制される可能性がある。

例えば、Snodgrass (1992) は、性別と地位が異なる相手の場合、人は相手の性別よりは地位により敏感に反応することを明らかにしている。また、Gonzales et. al. (1990) も、性別より、自分の行為が相手に及ぼした被害の程度や、相手と自分との地位の違いのほうが実験参加者の積明行動に大きな影響を与えていることを示している。さらには、このような社会的関係による影響だけでなく、自己評価の維持や高揚のために所属集団へのアイデンティティを促進・抑制するという動的な過程が存在する可能性がある (Spears, 2001)。

Turner et. al. (1987) の主張で検討すべき第二の点は「類似性」もしくは「差異性」の認知の成立である。

一般に、類似性・差異性の認知は、そこで行われる社会的相互作用の性質に大きな影響を与えると考えられる。この影響の第一は、感情的な影響である。これまで多くの社会心理学的研究が、相互の類似性と対人魅力とのあいだに強い関連があることを示してきた (例えば、Festinger, 1954; Byrne, 1961)。類似した他者は、社会的実在性をもたらす、自らの行動の妥当性を保証し、あるいは、どのような行動をとるべきか、その方向性を示す。

類似性・差異性をもたらす影響の第二は、相互のコミュニケーションや共通理解の容易さ・困難さへの影響である。相互に等質なカテゴリーに属している他者とのあいだではコミュニケーションが取りやすく、合意形成や共通理解も容易になるであろう (例えば Newcomb, 1953)。

自己に関するどのようなカテゴリーが顕在化するのかにたいして社会的状況や社会的な文脈が重要な働きをしていると考えることができる。しかし、どのような社会的文脈に行動を位置づけるのかは、まったく恣意的であり、個人によって異なる可能性がある。この差異性が存在するからこそ、相互の類似性が大きな意味を持つのであろう。

ただし、このような集団成員の「類似性」もしくは「差異性」の認知もまた状況による影響や社会的文脈による影響を受けるのである (Doise, Deschamps & Meyer, 1978; Wilder, 1984)。

所属する集団の集団凝集性も類似性認知に影響する。集団成員とのかかわりが肯定的なものである場合 (集団成員が魅力的な場合) には、類似性認知が高まり非類似性や差異性の認知は低下するが、逆に集団成員が魅力的ではない場合には、非類似性や差異性の認知が高まるのである (e.g. Brown & Wootton-Millward, 1993)。あるいは、集団間に競争や対立が存在する場合も、カテゴリーの顕現性が高まると考えられる。このような状況においては、カテゴリー間の対比効果と各カテゴリー内の同化効果が強まり、自己カテゴリー、内集団アイデンティティ

が高まるであろう (Turner, Hogg, Oakes, Reicher & Wetherell, 1987)。また、社会的文脈の効果は、他者 (Doosje, Haslam, Spears, Oakes, & Koomen, 1998) のステレオタイプの描写や内集団ひいき (Doise & Sinclair, 1973) などに影響することが見いだされている。

一般に集団内での社会的相互作用においては、成員相互の類似性を確認しようとする傾向が存在していると考えることができる。例えば、Stasserら (Stasser & Titus, 1987; Stasser, Taylor & Hannna, 1989) は、実験的に集団の全成員に共通する共有情報と、個々の成員が独自に保有する固有な非共有情報とを与え、集団での議論がどのように進行するかを検討した。その結果、議論の過程では、共有情報だけが議論され、非共有情報が議論されることがほとんどないことが示されている。

特に、いかに優秀な成員をそろえたとしても、集団の凝集性が高く、等質な成員から集団が構成されている場合、集団的浅慮とでもいべき集団での決定がみられることがある (e.g. Janis, 1972)。この集団的浅慮を防ぐためには、自分たちとは異なった判断を有する他者を集団成員に加えたり、最終決定の前に、自分たちの原案に対して批判的になるセッションを加えたりすることが必要であると言われている (蜂屋, 1999 参照)。この集団的浅慮の現象は、等質性の高い集団において、異質性や差異性の高い見解や情報が集団において自然発生的に検討されることが困難であることを示していると考えられる。集団内で異質性や非類似性が顕在化することは、集団の活動にとって妨害的に働くことが多いからであろう。

ただし、相互の異質性や差異性を確認する方向での相互作用が行われる可能性も考えられる。例えば、外国人のなかに自分一人だけがいるような場合などでは、相互の異質性を前提とした社会的相互作用が開始され、そのなかで相互の異質性や差異性を確認しようとする試みがなされるようになるかもしれないのである。

このように基本的に相互の等質性を仮定して社会的相互作用が開始される場合も、相互の異質性や差異性を前提として社会的相互作用が開始される場合も、ともに存在していると考えることができよう。

そして、等質性を仮定して相互作用が開始された場合には、相互の等質性を確認する方向での相互作用が行われることになり、その結果、相互の等質性がより強固になるという循環的な過程を考えることができる。反対に、相互の異質性や差異性を仮定して相互作用が開始された場合には、相互作用において異質性がみいだそうとしたり、その異質性を維持・強化する方向での相互作用プロセスが生起するようになると予想される。このような自己確証的 (self-confirmative)

で循環的な相互作用プロセスが生まれると考えられるのである。

集団の生産性を高めることが必要な社会的状況においては、相互に異なった多様な知識や資源を有する成員が存在するほうがよい。しかし、一方でこのような成員の多様性や差異性は、自己カテゴリー化に影響するだけでなく、成員相互のコミュニケーションや共通理解を困難にさせ (Newcomb, 1953)、あるいは、成員相互の魅力を低減させることにもなりかねない (Festinger, 1954)。三浦・飛田 (2002) は、集団の構成が集団の創造的パフォーマンスに及ぼす効果について検討し、成員ひとりひとりが固有でユニークな知識やアイデアを有すること (成員の多様性)、しかしこれにもかかわらず、集団のレベルでは成員相互に発想の類似性が認められること (成員の類似性) がともに必要であり、この成員のあいだの多様性と類似性との相乗効果により、集団の創造的パフォーマンスが規定されるとする相乗効果モデルの妥当性を実験的に示している。

この結果は、自己カテゴリー化のダイナミックスを検討するさいにも、「集団内の類似性と集団間の差異性」だけでなく、集団内での類似性と差異性がもたらす影響についてさらに考慮する必要性を示唆していると考えられよう。

#### 引用文献

- Alexander, C. N. & Lauderdale, P. (1977). Situated identities and social influence. *Sociometry*, **40**, 225-233.
- Baumeister, R. F. (1998). The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.) *Handbook of social psychology* (4th ed.). New York: McGraw-Hill. pp. 680-740.
- Byrne, D. (1961). Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 713-715.
- Charters, W. W. & Newcomb, T. M. (1958). Some attitudinal effects of experimentally increased saliency of a membership group. In Maccoby, E., et al. (Eds.) *Readings in Social Psychology*. New York: Holt, Rinehart & Winston, pp. 276-281.
- Doosje, B., Haslam, S. A., Spears, R., Oakes, P. J., & Koomen, W. (1998). The effect of comparative context on central tendency and variability judgments and the evaluation of group characteristics. *European Journal of Social Psychology*, **28**, 173-184.
- Brown, R., & Wootton-Millward, L. (1993). Perceptions of group homogeneity during group formation and change. *Social Cognition*, **11**, 126-149.
- Doise, W., Deschamps, J. C., & Meyer, G. (1978). The accentuation of intra-category similarities. In H. Tajfel (Ed.) *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Gonzales, M. H., Pederson, J. H., Manning, D. J. & Wetter, D. W. (1990). Pardon my gaffe: Effects of sex, status, and consequence severity on accounts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 610-621.

- 蜂屋良彦 (1999). 集団の賢さと愚かさ ミネルヴァ書房
- 花輪尚子 (2002). 性別カテゴリーの顕在化をもたらす社会的状況の検討 平成13年度福島大学教育学研究科修士論文 (未公開)
- 飛田操 (1986). コミュニケーション行為としての対人記述について 実験社会心理学研究, 26, 13-21.
- Higgins, E. T. (1996). The "self digest": Self knowledge serving self-regulatory functions. *Journal of Personal and Social Psychology*, 71, 1062-1083.
- Iyengar, S. S., & Lepper, M. (2000). When choice is demotivating: Can one desire too much of a good thing? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 995-1006.
- 磯部智加衣・浦光博 (2002). 内集団成員との上方比較後の感情・状態自尊心に, 集団間上方比較と特性自尊心が及ぼす影響 実験社会心理学研究, 41, 98-110.
- Janis, I. L. (1972). *Victims of groupthink*. Houghton Mifflin.
- Kenrick, D. T., McCreath, H. E., Govern, J., King, R. & Bordin, J. (1990). Person-environment intersections: Everyday settings and common trait dimensions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 685-698.
- 三浦麻子・飛田操 (2002). 集団が創造的であるためには一集団創造性に対する成員のアイディアの多様性と類似性の影響—実験社会心理学研究, 41, 2, 124-136.
- Newcomb, T. M. (1953). An approach to the study of communicative acts. *Psychological Review*, 60, 393-404.
- Schwartz, B. (2004). *The paradox of choice: Why more is less*. Ecco (瑞穂のりこ (訳) (2004) なぜ選ぶたびに後悔するのか—「選択の自由」の落とし穴 ランダムハウス講談社)
- Sedikides, C. (1993). Assessment, enhancement, and verification determinants of the self-evaluation process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 317-338.
- Snodgrass, S. E. (1992). Further effects of role versus gender on interpersonal sensitivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 797-811.
- Spears, R. (2001). The interaction between the individual and the collective self: Self-categorization in context. In C. Sedikides & M. B. Brewer (Eds). *Individual self, relational self, and collective self: Partners, opponents or strangers?* Philadelphia, PA: The Psychology Press. pp. 171-198.
- Stasser, G., Taylor, L. A. & Hannan, C. (1989). Information sampling in structured and unstructured discussions of three- and six- person groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 67-78.
- Stasser, G. & Titus, W. (1987). Effects of information load and percentage of shared information on the dissemination of unshared information during group discussion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 81-97.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- Turner, J. C. & Onorato, R. (1999). Social identity, personality and the self-concept: A self-categorization perspective. In T. R. Tyler, R. Kramer, & O. John (eds.) *The psychology of the social self*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wilder, D. A. (1984). Predictions of belief homogeneity and similarity following so-



cial categorization. *British Journal of Social Psychology*, **23**, 323-333.